HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1898年「学位令」下における北大教官・卒業生の学位取得
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 10, 1-24
Issue Date	2015-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59208
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA10_000.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜ 論　　文 ＞

1898年「学位令」下における北大教官・卒業生の学位取得

山本　美穂子

はじめに

1897年６月京都帝国大学の新設に伴い、帝国大学が東京・京都の２大学となったことから、1898年12月９日学位令が改正された。改正された学位令では、学位は「博士」と規定され、学位授与権は文部大臣にあることに変わりはなかったが、「博士」は５種類（法学・医学・工学・文学・理学博士）から９種類となり、新たに農学博士が設置された。札幌農学校にとって、この改正は重大な出来事であったに違いない。

しかしながら、大学沿革史の『北大百年史』通説（1982年発行）は、「間もなく学位令が改正され、東京・京都両帝国大学卒業生には学位が授与されるようになるとの伝聞により、農学校卒業生も同様に扱うよう求めた（略）しかし、その後改正された学位令（一八九九(ママ)年十二月）にはそのような規程はなかった」（127頁）と本文にあるだけで、「博士」を規定した学位令が札幌農学校に結びつくものと捉えなかった。巻末の沿革年表では、1898年学位令の改正さえ、記載していない。1887年５月20日学位令公布に伴って、「学士」は学位ではなく、「一種ノ称号」とされた[1)]。『北大百年史』通説は、学位を「学士」に関連づけて記述する程度にとどまり、1898年学位令の改正について、札幌農学校がどのように捉えたのか、札幌農学校にどのような影響を与えたのか、考察・記述することはなかった。

1898年12月学位令の公布時、札幌農学校は大学昇格運動の最中にあった。1895年４月北海道庁所管から文部省直轄学校となった札幌農学校は、文部省より教育程度の低下・規模の縮小をもたらすような校則改正を強いられ、1896年９月には本科のひとつであった工学科、本科進学前の準備教育課程である予科を廃止された。札幌農学校長佐藤昌介は、札幌農学校の教育程度を従前と同程度に保持するのに苦心していた。1898年１月に文部大臣に宛てて「札幌農学校拡張意見書」を提出、３月に文部省実業教育局長小山健三を農学校視察に迎えて農学校の実情・功績を主張するなど、佐藤昌介は奔走した[2)]。そして、最終的には札幌農学校を帝国大学に昇格させるため、佐藤昌介は、「農黌拡張論ヲ主張シ殊ニ程度ヲ上セ（博士等）学位ヲ授与シ進ンテ北海大学ヲ創起スル㆒迄充分北海道将来ノ為めニ議論スル様」、同窓生・関係者（開拓使元官吏）等を動員して、文部省当局の枢要人物に直接・間接的に嘆願・交渉し、大学昇格運動を展開していた[3)]。

そこで、本稿では、(1) 1898年学位令公布直後に札幌農学校校長佐藤昌介がとった行動を確認し、(2) 1898年学位令下において、札幌農学校・東北帝国大学農科大学（1907年９

月～1918年３月）・北海道帝国大学農科大学（1918年４月～1919年３月）・北海道帝国大学農学部（1919年４月～）〔本稿では、これらを「北大」と総称として記す〕[4]の教官・卒業生の学位取得状況を明らかにし、学位取得は札幌農学校における大学昇格運動の一環に位置づくものであったことを考察するものとする。

なお、学位令は、1918年12月６日大学令の公布（翌年４月１日施行）に伴って、1920年７月５日、再び改正された。1920年改正の学位令では、学位授与権は大学に移行し、学位を授与される者は学位請求論文による者（研究科に２年以上在籍して論文を提出して審査に合格した者、または、論文を提出して学位を請求し審査で認められた者）に一本化され、1898年公布の学位令から大きく変化した[5]。そのため、本稿では、第１章で1898年公布の学位令の内容について確認することとする。

１．1899～1907年における札幌農学校卒業生の学位取得

１－１．1898年12月９日学位令の公布

1887年５月20日公布の学位令は、学位を「博士」と「大博士」の２等級とし、文部大臣に授与権限を置いた。これにより、従来、学位であった「学士」は称号となった。「博士」の学位は、５種類（法学・医学・工学・文学・理学博士）、その取得資格は、(1) 帝国大学大学院に入り定規の試験を経た者、または、(2) これと同等以上の学力がある者として帝国大学評議会の議を経た者とした[6]。

1898年12月９日改正された学位令は、下記のとおりである[7]。

学位令（1898年12月９日公布、勅令第三百四十四号）

第一条　学位ハ法学博士、医学博士、薬学博士、工学博士、文学博士、理学博士、農学博士、林学博士及獣医学博士ノ九種トス

第二条　学位ハ文部大臣ニ於テ左ニ掲クル者ニ之ヲ授ク

一　帝国大学大学院ニ入リ定規ノ試験ヲ経タル者又ハ論文ヲ提出シテ学位ヲ請求シ帝国大学分科大学教授会ニ於テ之ト同等以上ノ学力アリト認メタル者

二　博士会ニ於テ学位ヲ授クヘキ学力アリト認メタル者

帝国大学分科大学教授ニハ当該帝国大学総長ノ推薦ニ依リ文部大臣ニ於テ学位ヲ授クルコトヲ得

第三条　学位ヲ有スル者其ノ栄誉ヲ汚辱スルノ行為アルトキハ博士会ノ議ヲ経テ文部大臣其ノ学位ヲ褫奪ス

第四条　明治二十年勅令第十三号学位令ニ依リ授与シタル学位ハ本令ノ学位ト同一ノモノトス

第五条　本令ニ関スル細則ハ文部大臣之ヲ定ム

1898年改正の学位令では、学位授与の権限は、従前通り、文部大臣に置かれた。ひとりも授与されることがなかった「大博士」は設けられず、学位は「博士」のみとなった。「博士」の学位は、従前の５種類に、新たに４種類（薬学・農学・林学・獣医学博士）[8]を加えて９種類となった。博士の学位取得資格は、(1) 大学院に入り定規の試験を経た者、または、(2) 論文を提出して学位を請求し、帝国大学分科大学教授会で(1)と同等以上の学力がある者と認められた者、(3)「博士会」において学位を授けるべき学力があると認められた者、(4) 帝国大学総長推薦を受けた分科大学教授との４区分となった。学位資格審査の審議が、評議会から教授会の権限へ移行し、従前よりもより専門性をもって学術審査をする体制となった[9]。

１－２．博士推薦に関する札幌農学校長佐藤昌介の具申

学位令の公布後間もない1898年12月19日、札幌農学校長佐藤昌介は、在京の同窓生・関係者に一斉に電報を打った[10]。文部属の松永武雄（札幌農学校第４期生）には「人ヲ上京セシムル方ヨロシキヤ」と、渡瀬寅次郎（同第１期生、東京興農園長）には「宜敷御尽力アリタシ　人必要ナレバ上京セシムベシ」と、貴族院議員の湯地定基（元開拓少書記官）には「学位ニ関シ南ヲ出京致サセベキヤ　御意見如何」[11]と、札幌農学校卒業生の学位取得に向けて、迅速に始動した。

その後、佐藤昌介は、文部大臣に宛て「学位授与ノ義具申」を、12月23日付で４名（南鷹次郎、宮部金吾、廣井勇、新渡戸稲造）、1899年１月７日付で１名（渡瀬庄三郎）について送付した。さらに、１月18日付電報で、渡瀬寅次郎に履歴書を至急送付するよう、「農事ニ関スル〻ハ委敷記載アレ」と但し書きして送り、１月23日付で渡瀬寅次郎の具申書を文部大臣宛に出した。６名の具申内容は、表１のとおりである[12]。具申書で、佐藤昌介は、各人の札幌農学校卒業後について、①内地留学、②海外留学（留学経験がない場合は、海外視察）、③海外大学での学士・修士・博士の取得、④母校教官としての教育実績年数（後進の育成）、⑤研究業績（著書、論文）、⑥学理の実地・応用をあげて、「其学業及経歴上ニ於テ学位ヲ受ケ得ラルヘキ学力アリト認メ候条特別ノ御詮議ヲ以テ博士会ノ議ニ付セラレ」、「博士ノ学位ヲ授ケラレ候様致度別紙履歴書ヲ添へ此段謹テ具申候也」と結んだ。南・新渡戸・渡瀬寅次郎には「農学博士」を、宮部・渡瀬庄三郎には「理学博士」を、廣井には「工学博士」を博士会にて詮議するよう嘆願した。

表１　博士推薦の具申

氏名（卒業期・年）	具申内容
南鷹次郎 （２期、1881年卒）	①駒場農学校にて獣医学を１カ年半修学 ②1893年６月渡米、北米農業実況取調に従事（北海道庁依嘱） ④教授として、農学・畜産学等、学生を薫陶、農学士養成に９カ年 ⑤第一～第八農場の管理に従事、農芸学理の応用と農事実験に従事

宮部金吾 （２期、1881年卒）	①東京大学において植物学を２カ年専修 ②米国ハーバード大学に３年間留学、欧州を経て帰国 ③米国ハーバード大学にて、理学博士（D.S.）の学位を受領 ④教授として、植物学及び植物病理学等、学生を薫陶、学士養成に10カ年 ⑤著書に、*The Flora of the Kurile Islands., The Life History of Macrosporium parasiticum,Thüm.*　など
廣井勇 （２期、1881年卒）	②米国にて、ミシシッピー河改良工事係雇、鉄道会社技手、橋梁会社技手として土木及び建築事業に従事すること４カ年。独逸スタットカット府大学にて、土木工学及び建築水利工学等を１年間研究。英仏独諸国の鉄道、土木工事を視察して帰国 ③スタットカット府大学にて、土木工師の学位を受領 ④工学科担任教授として、工学士の養成に８カ年 ⑤著述には、*Plate-girder Construction.*,『築港』巻ノ一 ⑥北海道庁技師、臨時築港事務所長として、函館・小樽の築港事業に従事
新渡戸稲造 （２期、1881年卒）	①東京大学にて、経済学・統計及び英文学を１カ年修業 ②米国ジョンズ・ホプキンス大学にて、経済・史学等を３カ年修業。独逸ボン大学、ベルリン大学、ハレ大学にて農政・農業経済・農業史・統計等を４カ年研究 ③ハレ大学にて、Magister Artium 及び Ph.D.の学位を受領 ④教授として、農政・農業史・農学総論等、学生を薫陶、学士養成に７カ年 ⑤著述には、*Japanischer Grand Besitz., Intercourse between the United States and Japan.*,『農業本論』など
渡瀬庄三郎 （４期、1884年卒）	①東京大学にて、動物学を２カ年専修 ②米国ジョンズ・ホプキンス大学にて４カ年官費留学、同大学及びシカゴ大学にて８年７ヶ月私費留学。今なお、シカゴ大学にて動物学専修。 ③ジョンズ・ホプキンス大学にて、Ph.D.の学位を受領 ⑤著書には、*On the Phenomena of Sex Differentiation., On the Morphology of the Compound Eyes of Arthropods.*　ほか５論文 ⑥米国政府より水族調査委嘱を受け、現地探究に従事、学理を応用すること数カ年
渡瀬寅次郎 （１期、1880年卒）	②英国にて倫敦府発明品万国博覧会の事務及び農学校の農事教育調査に１カ年従事 ⑥茨城県中学校長、茨城県師範学校長、大日本農会幹事、東京農園事業監督員、東京農学校講師・商議委員、大日本農会常任議員、日本園芸会商議員、農商工高等会議臨時議員、大坂硫曹株式会社人造肥料製造顧問、東京地方森林会議議員などとなり、専ら農芸学理の応用と農事事業に10カ年従事

備考　札幌農学校簿書№631「明治三十二年　札幌農学校公文録　第一冊　秘密文書　職員異動」より作成。「具申内容」欄の丸数字は、本文中に具申内容毎に付した丸数字と連動する。

（1）宮部・南は現教授であり、今後の校務運営にも中心的な人材として、（2）新渡戸は非職教授[13]・廣井は元教授であるが、大学昇格後の教授として不可欠な人材として、（3）渡瀬庄三郎は動物学専門の教授候補者として[14]、佐藤昌介には博士の学位を取得させる意図があったと考えられる[15]。

さらに、佐藤昌介は、1899年２月28日付で、東京帝国大学の総長（菊池大麓）と全評議

員12名（各分科大学長及び各分科大学教授各１名）宛てに、南・新渡戸・渡瀬寅次郎３名を農学博士として選考するよう、下記のように推薦文を送付した[16]。

拝啓　益々御多祥奉賀候陳ハ客歳十二月学位令発布相成候ニ就テハ博士会規則第十条[17]ニ依リ貴評議会ニ於テ農学博士御推薦可相成事ト存候然ルニ本校教授南鷹次郎外二名ハ学業及経歴上ニ於テ農学博士ノ学位ヲ受ケ得ラルヘキ学力アル者ト被認候ニ付御参考迄ニ本人共ノ略歴ヲ別紙之通申述候間此際御推薦ノ栄ヲ賜ハリ候様切望ノ至ニ御座候　敬具

二月廿八日

札幌農学校長　佐藤昌介

佐藤昌介の奔走は続き、1899年３月８日付で文部次官に宛て、「博士推薦ニ関スル件」として、下記のとおり、嘆願書を送った[18]。嘆願書で、佐藤昌介は、札幌農学校卒業生は充分博士の資格を具備する経歴と業績があるので、博士会または帝国大学評議会の議に附すよう、主張した。

客歳十二月勅令第三百四十四号ヲ以テ学位令改正発布相成候ニ付過般大臣ニ上申致置候本校出身ノ者ハ十数年間各自其学術ヲ専攻シ其経歴及成績ニ於テ充分博士ノ資格ヲ具備セルモノト被認候ニ付此際博士会又ハ評議会ノ議ニ附セラレ候様特別ノ御詮議相成度此段申進候也

明治二十二年三月八日

校長

以上のように、札幌農学校長佐藤昌介は、学位令の改正を大学昇格運動に最大限に利用しようとした。札幌農学校は、「充分博士ノ資格ヲ具備セルモノ」、「博士ノ学位ヲ受ケ得ラルヘキ学力アル者」を輩出していることを、文部大臣・東京帝国大学評議会・文部次官にアピールし、札幌農学校の存在感を示した。佐藤昌介には、札幌農学校卒業生は駒場農学校卒業生と遜色がなく、決して劣るものではないこと、駒場農学校が東京帝国大学農科大学に昇格した現在では札幌農学校を同じく大学昇格させるべきであることを主張する意図があったに違いない。

その後、学位令を管轄する文部省専門学務局の局長上田萬年から、1899年３月20日付で、「貴校出身者ヲ博士候補者トスル件ニ付再応具申之趣有之尚本月八日付ヲ以テ次官宛御申出ノ次第モ有之候処右ハ成規上貴校ヨリ具申可相成筋ノモノニ無之ニ付唯為参考留置カレ候儀ニ有之候条右様御承知相成度此段通牒候也」と、学位令成文上は札幌農学校から博士候補を具申するものではなく、具申は参考留置に処する旨、通牒があった[19]。

東京帝国大学評議会では、博士会規則第十条により、２月７日・２月14日に農学博士選

考の審議を行い、投票を以て選考を終えていた[20]。３月24日付『読売新聞』は、博士候補者が文部大臣のもとで最終決定の見込みであること伝えている[21]。３月20日付の文部省通牒は、農学博士選考の審議が終了したことと共に、佐藤昌介からの具申内容は農学博士選考の審議で既に鑑みていることを暗示する意図があったと考えられる。

１－３．札幌農学校卒業生の学位取得状況

1899年３月27日、文部大臣は新たに101名に学位を授与した。札幌農学校卒業生は、佐藤昌介と、佐藤昌介が推薦していた５名の内から４名（新渡戸稲造・宮部金吾・渡瀬庄三郎・廣井勇）に学位が授与された[22]。佐藤昌介・新渡戸稲造は東京帝国大学評議会の審議で、宮部金吾・渡瀬庄三郎は理学博士会の推薦で[23]、廣井勇は工学博士会の推薦で、それぞれ学位を授与された（表２）。佐藤昌介による博士推薦の具申は、東京帝国大学評議会、評議員が属している理学博士会・工学博士会に、一定の効果があったものと考えられる。

一方、1899年３月27日に農学博士を授与された者は合計８名であった。これは、農学博士会の開会に必要な７名以上の確保を意味した。８名の内訳は、(1) 東京帝国大学総長の推薦による農科大学教授３名（玉利喜造、横井時敬、本田幸介）、(2) 東京帝国大学評議会が選考した５名（沢野淳、古在由直、恒藤規隆、佐藤昌介、新渡戸稲造）である。

８名の出身校は、駒場農学校３名（玉利・横井・恒藤・沢野）、東京農林学校２名（本田・古在）、札幌農学校２名（佐藤・新渡戸）であった[24]。東京帝国大学評議会が選考した５名中、佐藤・新渡戸以外の３名の経歴は、沢野淳が東京農事試験場長（駒場農学校1883年卒業・農芸化学士、1889年欧米視察）[25]、古在由直が東京帝国大学農科大学助教授（駒場農学校1886年卒業・農学士、1895～1900年文部省ドイツ派遣留学生）[26]、恒藤規隆が農商務省技師・地質調査所土性課長（駒場農学校1880年卒業・農学士、1897～1898年欧米視察）[27]であった。ドイツ留学中の古在は農科大学教授候補者、沢野は農商務省所管の農事試験場創設の功労者、恒藤は農商務省による土性調査の創始に従事した功労者という位置づけで、東京帝国大学評議会が選考したと考えられる。海外の大学で Ph.D.を取得していたのは、佐藤昌介と新渡戸稲造のほかにはおらず[28]、その海外経験と学歴は傑出していた。

第１回農学博士会は、1899年４月22日上京した佐藤昌介にあわせ、５月１日文部省において開会した[29]。古在・新渡戸は海外在中のため、６名での開会となった。「充分尽力之心得ニ御座候」[30]との意気込みで臨んだ佐藤昌介は、1899年３月27日に学位を授与されなかった南鷹次郎と渡瀬寅次郎を、改めて推薦した。その結果、「博士候補者選挙ニ取懸リ候処酒勺[31]、南ノ両氏全会一致ヲ以テ推薦ノ事可決」となり、南鷹次郎は農学博士会の推薦により農学博士を授与される見通しとなった。しかし、「渡瀬氏ノ為め尽力候得共事行ハレス残念仕候」と、佐藤昌介の力も及ばず、渡瀬寅次郎は落選した[32]。また、東京帝国大学評議会での農学博士選考の審議においても、「東京評議員中ニ異議ヲ生シ」、渡瀬は多数決により落選していたことを在京中の佐藤昌介は知った[33]。農学博士会は、多数を占める駒場農学校・東京農林学校卒業生を前にして、佐藤昌介の意のままにはならない。東京

表 2　学位を取得した札幌農学校卒業生（1899～1907年）

授与日	氏名	博士	博士審議	職名
	学歴（出身校／海外留学／海外での学位）			
	【専門】学位論文（下線）、主な研究業績			
1899.3	佐藤昌介	農学	評議会（東京帝国大学）	札幌農学校校長兼教授
	1880年札幌農学校卒業／1883–86年米・独国留学／Ph.D.（1886）			
	【農業経済学・殖民学】*History of the Land Question in the United States*（1896），「大農論」（1888）、「殖民論」（1889）、「北海道農業之進歩」（1891）、『威氏経済学』（1891）ほか			
1899.3	新渡戸稲造	農学	評議会（東京帝国大学）	非職札幌農学校教授
	1881年札幌農学校卒業／1884–1891年米・独国留学／Ph.D.（1890）、M.A.（1890）			
	【農政学・殖民学】 *Über den japanischen Grundbesitz, dessen Verteilung und landwirtschaftliche Verwertung : eine historische und statistische Studie*（1890），「疎居的村落と密居的村落」（1891）、『農業発達史』（1897）、『農業本論』（1898）ほか			
1899.3	渡瀬庄三郎	理学	博士会	University of Chicago 助教授
	1884年札幌農学校卒業／1886–90年米国留学／Ph.D.（1890）			
	【動物学（細胞学・比較組織学）】*On the Phenomena of Sex Differentiation*（1892）			
1899.3	宮部金吾	理学	博士会	札幌農学校教授
	1881年札幌農学校卒業／1886–89年米国留学／D.S.（1889）			
	【植物学（植物分類学・植物病理学）】*The Flora of the Kurile Islands*（1890）			
1899.3	廣井勇	工学	博士会	北海道庁技師
	1881年札幌農学校卒業／1883–89年米国留学／C.E.（1887）			
	【土木工学】『函館港湾調査報文』（1894）、『築港』（1898）			
1899.6	南鷹次郎	農学	博士会	札幌農学校教授
	1881年札幌農学校卒業			
	【農学】「北海道に栽培する苹果の種類」（1892）、「小果樹の栽培に就て」（1896）、「犁耕と北海道農との関係に就て」（1897）ほか			
1903.12	松村松年	理学	論文（東京帝国大学）	札幌農学校教授
	1895年札幌農学校卒業／1899–1902年独国・墺太利留学			
	【昆虫学】「本邦産蝉類九篇十五種」、『害虫駆除全書』（1897）、『日本昆虫学』（1898）、『日本害虫篇』（1899）ほか			
1906.9	新渡戸稲造	法学	総長推薦（京都帝国大学）	京都帝国大学法科大学教授
1907.8	大島金太郎	農学	論文（東京帝国大学）	札幌農学校教授
	1893年札幌農学校卒業／1898–1901年米・独国留学			
	【農芸化学】「酵素ノ「ゴム」及「インヴェルチン」ニ就テ」、*A Digest of Japanese Investigations on the Nutrition of Man*（1905）ほか			

備考　『官報』、「退職者履歴資料」（北海道大学大学文書館蔵）、「故理学博士農学博士渡瀬庄三郎君を憶ふ」（『札幌同窓会第五十一回　昭和四年十二月』）、「故廣井勇君小伝」（『札幌同窓会第五十回報告　昭和三年十二月』8頁）、『札幌同窓会第七回報告　明治三十二年二月』28頁等より作成。国名は、適宜、略称を用いた。

帝国大学評議会も「如何トモ力ノ及フ所ニ無之無余議事情」と痛感した佐藤昌介は、札幌農学校長として、(1)札幌農学校卒業生からひとりでも多くの博士を輩出させること、(2)東京帝国大学農科大学の教授と相応するよう、札幌農学校教授に博士の学位を取得させること、(3) 札幌農学校を帝国大学にいち早く昇格させることを、改めて課題に据えたと考えられる。

札幌農学校が帝国大学に昇格しない限り、博士会が札幌農学校卒業生以外の者で多数を占める以上、札幌農学校卒業生は、東京帝国大学に学位請求論文を提出して、学位を取得する道しかない。そのような状況下で、松村松年（学位申請時は助教授、学位取得時は教授）[34]が1903年12月26日に理学博士を、大島金太郎（教授）が1907年８月14日に農学博士の学位を取得した[35]。いずれも、文部省外国留学生として海外研究を経て、東京帝国大学に学位請求論文を提出して、博士の学位を取得した。

２．帝国大学昇格後の学位取得状況

２－１．1898年学位令のもとで学位を取得した北大卒業生・教官

1907年９月１日、東北帝国大学が設置となり、札幌農学校は東北帝国大学農科大学として宿願の帝国大学に昇格した。東北帝国大学農科大学長に就任した佐藤昌介は、農科大学長として、東北帝国大学からの独立を見込んで、農科大学の布陣を強固にするため、農科大学の教官が学位を取得することを推し進めた。農科大学の教授には東北帝国大学総長推薦により学位を、助教授には学位請求論文により学位を取得させた。

1907年９月以降、卒業生・教官における学位取得状況は、表３のとおりである。卒業生からは６種の博士（農学・理学・工学・法学・獣医学・文学博士）が、東京帝国大学理科大学林学科卒業の教官からは林学博士が出た。

なお、表３には1920年７月学位令が改正となって以降に学位を授与された者がいるが、これらは、いずれも、1898年公布の学位令下で学位請求をして、1898年公布の学位令により学位を授与された者である。授与が遅れた理由は、論文審査による選考審議に時間を要したことによる。

表３　学位を取得した北大卒業生・教官（1908～1928年）

授与日	氏名	博士	博士審議	職名
	学歴（出身校／海外留学／海外での学位）			
	【専門】学位論文（下線）、主な研究業績			
1908.3	遠藤吉三郎	理学	論文（東京帝大）	教授（水産学科）
	1901年東京帝国大学理科大学卒業／1912-14年独・英国・諾威留学			
	【水産植物学】「日本産真正珊瑚藻亜科植物」、『海産植物学』（1881）、『日本有用海産植物』（1903）、「石炭藻亜科分類標徴」（1905）ほか			

1908.10	八田三郎	理学	論文（東京帝大）	助教授
	1892年東京帝国大学理科大学撰科修了／1913–15年英・仏・独国留学			
	【動物学】「やつめニ於ケル胚葉ノ形成ニ就キテ」、「動物界に現はるゝ生活法」（1893）、「Carl Rabl の中胚葉説」（1893）、「日本に於けるヤツメの種類及び配布」（1900）ほか			
1908.12	伊藤清蔵	農学	論文（東京帝大）	盛岡高等農林学校教授
	1900年札幌農学校卒業／1903–06年独・仏国留学			
	【農業経営学】「支那、日本及ヒ南欧諸国生糸生産上ノ国際的競争」、『農業金融論』（1900）、『韓国殖民管見』（1907）、『世界の蚕業競争と日本蚕業』（1908）ほか			
1909.12	新島善直	林学	論文（東京帝大）	教授（林学科）
	1896年東京帝国大学理科大学卒業／1905–08年独国留学			
	【造林学】「日本産「クリフアル」属（穿孔虫ノ一属）ニ就キテ」、「北海道産穿孔虫族及ヒ其森林ニ於ケル加害ノ状況」、「樹木の虫癭に就て」（1898）、「杉樹の保護」（1899）ほか			
1910.11	高岡熊雄	法学	博士会	教授
	1895年札幌農学校卒業／1901–04年独国留学			
	【農政学・殖民学】『北海道農論』（1899）、*Die innere kolonisation Japans*（1904）、『普魯西内国殖民制度』（1906）、「植民地ニ於ケル土地制度ヲ論ズ」（1909）ほか			
1911.6	吉井豊造	農学	総長推薦（東北帝大）	教授
	1885年駒場農学校卒業／1906–08年独・英・米国留学			
	【農芸化学】「東京府下ニ於テ販売スル人造肥料ノ成分」（1888）、「米糠ノ成分」（1888）、「藁薹に於ける燐酸肥料の試験」（1890）ほか			
1911.6	橋本左五郎	農学	総長推薦（東北帝大）	教授
	1889年札幌農学校卒業／1895–1900年独・仏国留学			
	【畜産学】「燕麦の麦奴予防に関する試験」（1891）、「林檎の害虫「コッドリン」蛾」（1894）、「家畜蕃殖論」『畜産学講義』上巻（1906）ほか			
1911.6	大野直枝	理学	論文（東京帝大）	教授
	1899年東京帝国大学理科大学卒業／1904–08年独国留学			
	【植物生理学】「向地的及ヒ向日的刺激過程ノ消失ニ就テ」、「蓮葉ニ於ケル盛ナル瓦斯排出ニ就テ」、「化学的刺激ニ由レル或ル藻類及ヒ菌類ノ生長ノ促進ニ就テ」ほか			
1912.12	郡場寛	理学	大学院（東京帝大）	講師
	1908年東京帝国大学理科大学卒業／1918–20年米・伊・英国・瑞西留学			
	【植物生理学】「綬草花穂ノ拗捩ニ関スル器械生理学的研究」、「二三ノ菊科植物ノ舌状花ニ於ル変化」（1908）、「生長ノ個体的変化ト外圍影響トノ関係」（1909）ほか			
1914.7	岡崎文吉	工学	論文（東京帝大）	内務技師
	1891年札幌農学校工学科卒業			
	【治水工学】「修築ヲ加ヘサル河川ノ処理及河川ノ一般水理ニ関スル二三問題ノ考究」、「上部みししつぴー河一般ノ改修工事ニ就テ」（1903）、『石狩川治水計画調査報文』（1909）ほか			
1914.11	時任一彦	農学	総長推薦（東北帝大）	教授
	1897年札幌農学校卒業／1901–04年独国留学			
	【農芸物理学】「人糞の新処理法」（1907）、『泥炭地改良及泥炭利用論』（1914）、「泥炭蘚草に就て」（1914）ほか			

1914.11	須田金之助	農学	総長推薦（東北帝大）	教授
	1893年札幌農学校卒業			
	【養蚕学】「蚕蚴に就いて」（1895）、『北海道蚕業論』（1900）、『最近養蚕論』（1902）、『野生絹糸虫論』（1904）、『蚕学』（1909）ほか			
1915.2	半澤洵	農学	論文（東北帝大農科大学）	助教授
	1901年札幌農学校卒業／1912–14年独・仏・米国留学			
	【応用菌学】「「クモノスカビ」属菌ノ研究」、「甘藍の腐敗病」（1901）、『雑草学』（1910）、「鰹節黴の研究」（1911）、*Studien über einige Rhizopus-Arten*（1912）ほか			
1915.2	三宅康次	農学	論文（東北帝大農科大学）	助教授
	1905年札幌農学校卒業／1914–17年米国留学			
	【農芸化学】「アルカリー性土壌中ニ普通ナル塩類ガ稲ノ生長ニ及ボス影響」、「鱈卵膜の化学的組成並に其分解産物に就て」（1912）、「ヒヨットコホ、ゾキの化学的組成及分解産物」（1912）ほか			
1915.3	小倉錡太郎	獣医学	博士会	教授
	1895年東京帝国大学農科大学卒業／1909–11年独・仏国留学			
	【獣医学（内科学）】『獣医学汎論』（1905）、「はすとーる式炭疽病予防接種試験成績」（1897）、「札幌地方の畜牛に流行する一種の伝染性生殖器病に就て」（1915）ほか			
1915.11	星野勇三	農学	総長推薦（東北帝大）	教授
	1901年札幌農学校卒業／1903–07年英・米・独・仏国留学			
	【園芸学】「結果と授粉」（1910）、「花芽の生成に就て」（1911）、『最新果樹栽培講義』（1915）ほか			
1917.2	宍戸乙熊	林学	総長推薦（東北帝大）	教授
	1902年東京帝国大学理科大学卒業／1908–12年独・米国留学			
	【林政学】「南北独逸に於ける林業及林政上の特色」（1913）、「商工立国と林業」（1914）、「北海道国有林に於ける部分林設定に就て」（1917）ほか			
1917.5	田中義麿	農学	論文（東北帝大農科大学）	助教授
	1909年卒東北帝国大学農科大学卒業／1920–22年英・米・仏・伊・独国留学			
	【動物学（遺伝学）】「家蚕ニ於ケル遺伝学的研究」、「家蚕の絹糸腺に関する研究」（1901）、「生殖細胞式の雌雄二型」（1914）、『蚕の遺伝と品種改良』（1917）ほか			
1917.12	素木得一	農学	論文（東北帝大農科大学）	台湾総督府技師
	1906年札幌農学校卒業			
	【昆虫学】「一点大螟蛾の研究」、「鞘翅目の一科に就て」（1907）、『綿吹介殻虫調査報告』（1911）、『台湾害虫目録』（1912）ほか			
1918.7	坂岡末太郎	工学	論文（京都帝大）	教授（土木工学科）
	1894年札幌農学校工学科卒業／1908–10年英・米・仏・独国留学			
	【鉄道工学】「軌道ノ変形ニ関スル研究」、『理論応用橋梁構造編』（1898）、『測量学講義』（1903）、『木橋設計参考図面』（1905）、『鉄道工学講義』（1912）ほか			
1918.8	明峰正夫	農学	論文（北海道帝大）	助教授
	1899年札幌農学校卒業／1920–21年英・米・仏・伊・独国・瑞典留学			
	【育種学】「稲ノ花ノ形態学的及生理学的研究」、『農業種子学』（1901）、『最新農具論』（1906）、『種子及育種』（1907）、『作物育種学　種子及育種後編』（1912）ほか			

1919.3	市川厚一	獣医学	大学院（北海道帝大）	大学院学生
	1913年東北帝国大学農科大学卒業／1923–25年独・仏・英・米国留学			
	【比較病理学】「人工的皮角ノ発生ニ就テ」、「実験用動物の腫瘍に就て」（1916）、「犬の多発生腫瘍例（乳房腫瘍、「スプレノーム」及び其他）に就て」（1917）ほか			
1919.6	真島健三郎	工学	博士会	海軍技師
	1896年札幌農学校工学科卒業			
	【建築学】「耐震構造問題に就て」（1927）、「重層架構建築耐震構造論」（1927）、『地震と建築』（1930）ほか			
1919.6	C. H. Peabody	工学	博士会	元札幌農学校教師
	Massachusetts Institute of Technology 1877年卒業			
	【機械工学】*Thermodynamics of the Steam-Engine and other Heat-Engines, Tables of the Properties of Steam and other Vapors, Manual of the Steam-Engine Indicator.* ほか			
1919.6	高橋栄治	農学	論文（北海道帝大）	教授（水産専門部）
	1907年札幌農学校卒業／1921–24年英・独・米国留学			
	【農芸化学】「紅藻類ノ粘質物ニ関スル研究」、『水産化学』（1913）、「ヒバツノマタの醋酸醗酵に就て」（1916）、「海藻より得たる一新種糖に就て」（1919）ほか			
1919.6	鈴木真吉	農学	論文（北海道帝大）	台湾総督府技師
	1901年札幌農学校卒業			
	【農芸化学】「乾酪成熟中ニ起ル醗酵ニ関スル化学的研究」、『不溶解性燐酸塩類と作物の燐酸吸収に就て』（1917）、『農業上より観察したる台湾気象の梗概』（1915）ほか			
1919.6	宮井健吉	林学	総長推薦（北海道帝大）	教授
	1905年東京帝国大学理科大学卒業／1909–13年独国留学			
	【森林利用学】「我邦木材単位並に材積算出法に就て」（1910）、「凍結針葉樹材ノ抗折強ニ就キテ」（1923）ほか			
1919.6	伊藤誠哉	農学	総長推薦（北海道帝大）	教授
	1908年東北帝国大学農科大学卒業／1921–23年英・米・独・仏国留学			
	【植物病理学】『燕麦の黒点病に就きて』（1912）、「稲に対する硫酸銅の影響並に籾種腐敗予防法」（1913）、「疫病に對する免疫性馬鈴薯に就て」（1918）ほか			
1919.7	東海林力蔵	農学	総長推薦（北海道帝大）	教授
	1901年札幌農学校卒業／1913–15年英・米・独国留学			
	【農学】「肥料三要成分が大麦の形態に及ぼす影響に就て」（1909）、「家畜飼料論」『畜産学講義』上巻（1906）			
1919.7	高松正信	農学	総長推薦（北海道帝大）	教授
	1907年札幌農学校卒業／1910–13年独・普・米国留学			
	【畜産学（馬学）】［本邦産馬に関する系統的研究］、［北海道競走用馬匹に関する研究］（1914）、「馬と牛と羊と」（1920）、［幼駒発育に関する研究］（1927）ほか			
1919.7	加藤泰治	獣医学	総長推薦（北海道帝大）	教授
	McGill University1899年卒業／1892–99年米・加国留学／D.V.S.（1899）			
	【獣医学】「稀有なる馬の異物性耳下腺炎の一例」（1914）			

1919.7	西垣恆矩	農学	博士会	共同人造肥料会社取締役
	1899年札幌農学校卒業			
	【農業経済学】『産業組合大全』（1907）、『園芸業と産業組合』（1908）、『蚕糸業と産業組合』（1908）、『英国の産業組合』（1913）、『独逸の産業組合』（1913）ほか			
1919.7	西田藤次	農学	博士会	植物検査所長
	1899年札幌農学校卒業			
	【植物病理学】「越中国産菌類」（1902）、『柑橘病害編』（1907）、『桃 葡萄 柿の病害』（1911）、『作物の病害』（1911）、『新編柑橘病害と予防法』（1914）ほか			
1919.7	大脇正諄	農学	博士会	実科講師（青森県農林技師）
	1896年札幌農学校卒業			
	【農学】『米穀論』（1899）、『最近米穀論』（1900）、「麦類の原種及原産地」（1909）、『我国の米問題』（1919）、『稲作ノ豊凶ニ関スル研究』（1919）ほか			
1919.7	堀正太郎	農学	博士会	農商務省技師
	1888年札幌農学校卒業			
	【植物学】「北海道松柏科植物ノ分布」（1889）、「日本産焦燥菌」（1892）、『農作物生理学』（1899）、『農作物病学』（1903）、『作物病虫害予防法』（1904）ほか			
1919.7	東郷実	農学	博士会	台湾総督府技師
	1905年札幌農学校卒業			
	【農政学】『日本植民論』（1906）、『独逸の産業と植民政策』（1911）、『瓜哇糖業論』（1913）、『台湾農業殖民論』（1914）、『台湾植民発達史』（1916）ほか			
1919.7	山田玄太郎	農学	博士会	盛岡高等農林学校教授
	1898年札幌農学校卒業			
	【植物病理学】『植物病理学』（1904）、「ギムノスポランギユムノ一新種」（1908）ほか			
1919.7	平塚直治	農学	博士会	帝国製麻(株)製線本部長
	1896年札幌農学校卒業			
	【植物病理学】「亜麻立枯病研究報告」（1896）、「本邦産メランプソレー亜科ノ或ル種類ニ就テ」（1898）、「亜麻茎の品質に関する研究」（1911）ほか			
1919.7	W. P. Brooks	農学	博士会	元札幌農学校教師
	Massachusetts Agricultural College1875年卒業			【農学】
1919.7	森本厚吉	法学	総長推薦（北海道帝大）	教授
	1901年札幌農学校卒業／1903–06年、1915–18年米国留学／Ph.D.（1916）			
	【経済学】『消費経済論』（1900）、「農民の生計に就て」（1915）、*The Standard of Living in Japan*（1918）、「日米『最小生活費』論」（1919）など			
1919.7	高岡熊雄	農学	総長推薦（北海道帝大）	教授
1919.7	松村松年	農学	総長推薦（北海道帝大）	教授
1919.8	逸見文雄	農学	大学院（北海道帝大）	助教授（申請時は大学院学生）
	1913年東北帝国大学農科大学卒業／1921–23年英・米・独・仏・伊国留学			
	【農芸化学】「日本産食用薯塊類ノ炭水化物ニ関スル研究」、「銀杏草及恵古苔ノ成分ニ就テ」、「洋芹根中の糖分に就て」、「漬物の酵素に就て」ほか			

1919.8	田所哲太郎	農学	論文（北海道帝大）	助教授
	1910年東北帝国大学農科大学卒業／1918–20年米・英・仏国留学			
	【農芸化学】「植物細胞質ニ関スル膠質化学的研究」、『食品化学』（1911）、「乳酸の製造に就て」（1913）、『米の生化学研究叢書』（1913）、『酵素化学』（1914）ほか			
1919.9	岡本半次郎	農学	論文（北海道帝大）	北海道庁技師
	1907年札幌農学校卒業			
	【昆虫学】「本邦産草蜻蛉ニ関スル研究」、「苹果病虫害及び其駆除予防法」（1908）、『実用害虫駆除予防法』（1909）、「本邦産擬蠟螂科」（1910）、『北海道害虫編』（1913）ほか			
1919.9	小熊捍	農学	論文（北海道帝大）	助教授
	1911年東北帝国大学農科大学卒業／1922–24年英・独・米国留学			
	【動物学（遺伝学）】「赤楊ニ寄生スル一新介殻虫ニ就テ特ニ其ノ変態ト解剖ヲ論ス」、「蜻蛉の染色体に関する研究」（1915）、「家蚕の染色体に就て」（1919）ほか			
1919.9	佐々木望	理学	論文（東京帝大）	教授（水産専門部）
	1909年東京帝国大学理科大学卒業／1927年英国留学			
	【動物学】「体腔に就きて（一般動物学）」（1908–09）、「日本に産する頭足十脚類）」（1909）、「Inioteuthis inioteuthis（Naef）及 Sepiola birostrata n. sp.に就きて」（1918）ほか			
1920.5	石田研	農学	論文（北海道帝大）	台湾総督府技師
	1905年東北帝国大学農科大学卒業			
	【農芸化学】「甘蔗搾汁ノ清澄並ニ製糖ニ関スル化学的研究」、「甘蔗成熟係数ニ関スル研究」、「甘蔗精蜜中ノ還元糖除去ノ一方法ニ就テ」ほか			
1920.7	逸見武雄	農学	大学院（北海道帝大）	大学院学生
	1915年東北帝国大学農科大学卒業／1921–23年英・米・独国留学			
	【植物病理学】「日本産「グレオスポリウム」族菌ノ形態並ニ生理ニ関スル知見」、「植物炭疽病菌数種ノ発育ニ及ホス温度ノ影響ニ就キテ」ほか			
1920.7	坂村徹	理学	論文（東京帝大）	助教授
	1913年東北帝国大学農科大学卒業／1919–21年米・英国・瑞西・瑞典・丁抹留学			
	【植物生理学】「核分裂ニ関スル実験的研究」、「そらまめニ於ケル染色体ノ狭窄ニ就テ」（1915）ほか			
1920.7	山根甚信	農学	論文（北海道帝大）	助教授
	1913年東北帝国大学農科大学卒業／1926–28年独国留学			
	【畜産学（繁殖学）】「馬ノ精液ノ理化学的性状並ニ精虫ノ生理ニ就テ」、「馬匹精液内に於ける精虫の数量及其授精能力との関係」（1919）			
1920.7	井口賢三	農学	論文（北海道帝大）	助教授
	1910年東北帝国大学農科大学卒業／1922–24年英・米・独国・瑞西留学			
	【畜産学（牛学）】、「日本ニ於ケル牛族ノ研究」（1920）、「日本ニ於ケル牛族ノ頭骨ニ関スル研究」、「朝鮮対馬及ヒ鳥取産牛ノ頭骨ニ関スル研究」、『世界之牛』（1917）ほか			
1920.7	宮脇冨	農学	論文（北海道帝大）	助教授
	1902年札幌農学校農芸科卒業／Kansas State Agricultural College 1907年卒業／1902–07年、1923–24年英・米・独国留学／M.S.（1909）			
	【農産製造学】「工業的煉乳（加糖）製造ニ関係ヲ有スル或要素ニ就テ」（1920）、「生乳酸度に就て」（1913）			

1920.11	吉田新七郎	農学	論文（北海道帝大）	講師
	1910年東北帝国大学農科大学卒業／1911–14年独国留学／D.S.（1912）			
	【畜産学（馬学)】「馬族ノ跗蝉及ヒ距疣ノ構造並ニ生理的意義ニ就テノ研究」、「支那ノ畜牛ニ就テ」、「支那馬ニ就テ」			
1922.3	里正義	農学	論文（北海道帝大）	助教授
	1909年東北帝国大学農科大学卒業／1918–20年英・米国・瑞西留学			
	【畜産製造学】「加糖煉乳ノ結晶ニ関スル研究」、「北海道に於ける単寧材料の研究」（1913)、『生物学的乳汁検査法』（1917)、『酪農化学』（1919）			
1928.3	大島正健	文学	論文（京都帝大）	（申請時はセブランス連合医学校教授）
	1880年札幌農学校卒業			
	【音韻学】「古韻ノ変遷」、『支那古韻考』前篇（1898)、『翻切要略』・『韻境音韻考』（1912)、『韻境』（1927）ほか			

備考　大学名・国名は、適宜、略称を用いた。『官報』、『文部省外国留学生表』、『札幌同窓会報告』、『東京帝国大学一覧』、前掲「退職者履歴関係資料」より作成し、M.I.T. 及びUMass Amherstの Webサイト、辻直人『近代日本海外留学の目的変容』（2010年、東信堂）掲載の「文部省留学生一覧表」を参照した。なお、「主な研究業績」は、学位取得以前のものを主に記載し、発表年を記載していない論文は学位論文及びその参考論文である。

２－２．帝国大学総長の推薦による学位取得

佐藤昌介は、東北帝国大学農科大学長に就任後間もなく、学位令第二条第二項「帝国大学分科大学教授ニハ当該帝国大学総長ノ推薦ニ依リ文部大臣ニ於テ学位ヲ授クルコトヲ得」により、農科大学教授に学位を授与させることに取り掛かった。1908年10月15日、文部省に登省した佐藤昌介は、「吉井、橋本、高岡三氏ヲ推薦之件ハ本省当局ニ於テ異議[議]無之吉井氏帰朝ヲ俟ツテ申出仕奉候協議仕置候」と、札幌農学校時代より教授であった３名（吉井豊造、橋本左五郎、高岡熊雄）を博士に推薦するよう、協議した[36]。1911年１月仙台に理科大学が設置となり、３月24日東北帝国大学初代総長として澤柳政太郎が就任すると、５月29日佐藤昌介は文部省で澤柳総長と面会・打ち合わせし、総長推薦により吉井・橋本両教授に農学博士を授与させる了承を得た[37]。６月26日、吉井・橋本に、総長推薦により農学博士が授与された。一方、高岡に対しては、専門が農政学であったことから、２名より先に、1910年11月24日、法学博士会の推薦により法学博士が授与された[38]。その後、1914～1917年、第二代総長（北條時敬）の下では、農科大学教授４名に、総長推薦により、農学博士３名と林学博士１名を出した。

1918年４月１日、北海道帝国大学が設置となり、北海道帝国大学初代総長には佐藤昌介が就任した。これにより、農科大学教授で学位を取得していない場合は、総長佐藤昌介の推薦により、学位を授与することが可能となった。1918年12月６日大学令が公布され、1919年２月７日には帝国大学令が改正された。学位令の改正が翌年に迫ると、佐藤昌介は1919年２月18日の教授会で、総長諮詢事項「学位授与ニ関スル件」として、「教授未タ学位ヲ授与セラレサル人ニシテ総長ヨリ推薦スヘキ者アラバ教授会ニ於テ調査アリタシ」と、北海道帝国大学総長の推薦により博士を授与すべき教授を調査するよう、教授会に諮詢し

た。学位令改正により、第二条第二項の総長推薦が廃止となる可能性が出たためである。

教授会では、各学科教授１名よりなる特別委員会を設けて調査し、学位を有する教授だけの会議を開いて審議することに決した。その後、３月18日・４月８日・６月５日・６月26日の教授会後、学位を有する教授だけの審議会議が開かれた。第１回会議（３月18日）では、その銓衡方針を「年功ヨリハ今日迄発表ノ論文ニ就テ銓衡スルコト」に定め、研究業績で銓衡することを確認した。会議における特別委員会の調査報告は、(1)研究業績(著書・論文についての学術評価)、(2) 教育実績（講座担任の実績)、(3) 海外留学経験の有無を主として行われた[39]。これにより、教授８名に対して、1919年６月に農学博士１名・林学博士１名を、７月に農学博士４名[40]・獣医学博士１名・法学博士１名[41]を出した。

２－３．学位請求論文による学位取得

1907年９月17日、東北帝国大学農科大学は第１回教授会を開催した。学位請求論文審査の権限をもつ教授会に、学位審査の議題が最初にあがったのは、1912年６月12日であった。文部大臣より、学位令細則第三条に依り、農学博士の学位請求論文１件を、農科大学教授会の議に付すよう令達があったためである。９月20日には、(1)審査委員３名の設置、(2)審査結果は教授会に提出、(3)審査委員の人選は農科大学長に一任という審査次第が決まった。12月17日、学位請求論文に対する審議が行われ、審査委員は、この学位請求論文は (1)行文不明瞭にして意義徹底せず、(2)「内容ニ於テ学術上貢献スルコトアリト認ムベキ事項更ニナシ」、(3)この種の研究に必要な素養を欠如しており、審査価値がないと断じた。審査委員の報告後、審査論文の評決は、教授会教授全数の４分の３以上出席し、かつ、その４分の３以上の同定を無記名投票で得られなければ評決しないことに決定した[42]。これ以降、学位請求論文に対する農科大学教授会の審査は、「学術上貢献スルコト」の有無に基準が置かれた。

1907年９月以降、1898年学位令下において、卒業生・教官で学位請求論文により学位を取得した者は26名であった。26名の内訳は、教官と技師とに大別される。さらに、教官においては、以下のように、本科（農科大学・農学部）と附設学科との間で、教官の学位取得の背景が異なっていた。

(1) 本科（農科大学・農学部）助教授の学位取得

1905年より札幌農学校教授を務めていた八田三郎は、1907年９月農科大学助教授への任官となった。八田の学歴が東京帝国大学理科大学動物学科撰科修了、理学士ではなかったことが要因であった。1908年10月16日、農科大学長佐藤昌介は文部当局に「八田氏之件モ打合都合宜敷学位受領後ニ申出仕奉候当局ニ協議仕置候」[43]と、学位取得後に八田の教授昇任の上申をする旨、協議した。動物学昆虫学養蚕学第一講座担任として、八田は不可欠な人材であった。八田は、専門が動物発生学（やつめ研究）であったため、学位請求論文を東京帝国大学理科大学に提出し、1908年10月27日理学博士を取得した[44]。佐藤昌介の上

申の通り、八田は1908年12月９日に農科大学教授に昇任した[45]。

一方、学位請求論文を農科大学教授会に提出して農学博士を取得したのは、その大部分が、本科（農科大学・農学部）の助教授たちであった。当初は、文部省外国留学生として海外留学から帰国後に申請・取得していた。しかし、農科大学の講座増設に伴う留学候補者の増加・医学部新設に伴う医学部教授候補者の留学により、文部省外国留学生枠の競争が激しくなったため、1917年以降は、学位取得後に留学辞令を受ける場合が多くなっていった。農学博士の学位を取得した助教授たちは、ほどなくして、教授に昇任した。

⑵　植物学第二講座教授への理学博士取得要請

1907年９月農科大学植物学第一講座担任に就任した宮部金吾は、植物学第二講座担任教授に、東京帝国大学理科大学植物学科卒業生を手配した。理学博士の柴田桂太を招聘し、その後は、大野直枝、郡場寛を採用した。大野は1910年教授として任官され、留学から帰国後の1911年に、理学博士を取得した。郡場は東京帝国大学大学院を経て、1913年農科大学講師を嘱託中の1913年に理学博士を取得し、1915年に教授に任官された[46]。

理学博士会の推薦による学位授与は、1899年３月27日以降は１度もなかった。また、農科大学では、理学博士の審議・推薦はできなかった。そのため、教授・助教授・講師にかかわらず、理学博士は、学位請求論文により東京帝国大学理科大学で取得する道に限られた。そのような状況下で、植物生理学分野の講座担任教授に理学博士を継承させたことは、農科大学植物学講座を学術的に揺るぎない形で編成しようとした宮部金吾の学究的な意図がうかがわれる。

⑶　附設学科教授の学位取得

札幌農学校は、中等実業教育課程として、1897年５月に土木工学科（1918年土木専門部に改組）を、1899年９月に森林科（1905年林学科、1910年林学実科に改組）を、1907年４月に水産学科（1918年水産専門部に改組）を附設した。札幌農学校卒業生で充当できない学科目については、学外から教官を採用した。森林科教授には、新島善直（1899年５月～、林学士）・宍戸乙熊（1902年８月～、林学士）を、水産学科教授には、遠藤吉三郎（1907年４月～、理学士）と大瀧圭之助（1907年６月～、B.A.）を採用した[47]。大瀧以外は、すべて東京帝国大学理科大学卒業生であり、博士の学位を持っている者はいなかった。

しかし、水産植物学（海藻研究）の担当として、1906年６月に水産学科教授の内定を受けた遠藤吉三郎は、任官前の1907年１月には学位請求論文を準備していた。学位請求論文は、東京帝国大学理科大学に提出後、審査には少なくとも２～３ヶ月は要するとして、「小生任命ニハ間ニ合ひ申まじく是非任命前ニ学位を要するならばそれ迄講師なり嘱託なりとし而学位を得て後本官として可然などと申し居り候」と宮部金吾に伝えた。指導教官の松村任三教授（理科大学植物学科）は、学位取得を急ぐ遠藤に対し、「何だて其様ニ宮部は学位を八釜敷云ふのだ　岡村[48]と同等の者ニして欲しいと云ふのか　ハ、、、」と苦笑し

たという[49]。遠藤が、水産学科は本科とは違う附設学科であることを正しく理解していたか不明であるが、“教授任官には学位が必須である”という認識を抱いていたこと、宮部金吾が本科教授同様に附設学科教授にも学位取得を要請していたことがうかがわれる。

一方、森林科教授２名は、農科大学設置に伴い1907年９月１日付で林学科教授に任官となった。本科課程である林学第一講座（1909年５月～）、林学第二講座（1910年９月～）が開設されると、附設学科は「林学実科」と改称され、本科課程の「林学科」とは区別された。附設学科の教授は、本科課程では助教授待遇であり、宍戸乙熊は農科大学助教授（兼務）となった。他方、林学第一講座担任には、すでに林学博士であった小出房吉が教授に招聘された。新島善直は留学から帰国後の1909年12月11日、学位請求論文により林学博士を取得した。これにより、1910年８月31日、林学第二講座担任（農科大学教授）に昇任した[50]。

農科大学の附設学科（水産学科・水産専門部、土木工学科・土木専門部、林学科・林学実科、農学実科、大学予科）の教授は、分科大学助教授相当であったため、総長推薦により博士の学位を授与されることはなかった。結局、これらの附設学科の教授は、学位請求論文によって学位を取得する道を選ばざるを得なかった。

⑷　技師の学位取得

学位請求論文により農学博士を取得した卒業生は、助教授・講師と盛岡高等農林学校教授のほかは、すべて技師であった。内訳は、台湾総督府農事試験場技師が３名（素木得一、石田研、鈴木真吉）、北海道庁農事試験場技師が１名（岡本半次郎[51]）である。学位請求論文により工学博士を取得した卒業生も、土木工学科教授のほかは、内務技師１名（岡崎文吉）であった。いずれも、論文審査の評価は、「学術上並ニ実際上有益」（石田研／1920年８月17日付『官報』393頁）、「実施[地]ニ学理ヲ適用シ能ク至難ノ治水問題ヲ解決シ得タルモノ」（岡崎文吉／1914年９月７日付『官報』122頁）などと、“実地に学理を応用”し得たかに基準が置かれた。

台湾総督府農事試験場技師を務めていた卒業生が、学位請求論文を農科大学に提出したのは、大島金太郎（東北帝国大学農科大学教授兼台湾総督府嘱託）の勧めがあったのではないかと考えられる。台湾総督府糖業試験場技師の三宅勉（札幌農学校21期生、1903年卒）が、「先般大嶌[島]先生も当場に御出張に相成り……其節再び学位の事につき御話被下仝先生より宮部先生へも御取計被下候事とかにて論文提出の事を御進め被下御厚志の程感謝仕候、当地の如き僻地にありて従来の如き調査程度にして猶学位請求の価値ありとやられ候は小生にとり難有事に有之」（1916年頃、４月14日付）[52]と恩師の宮部金吾に伝えているように、大島金太郎が再々学位請求論文を提出するよう勧誘している。当時、大島金太郎は、台湾総督府の各試験場を再編し、中央研究所の設置を計画する任に当たっていた。素木得一は農事試験場昆虫部長、鈴木真吉は同場農芸化学部長であった。1921年新設した中央研究所農業部（農業部長大島金太郎）では、糖業科長に石田研、植物病理科長に三宅勉、応

用動物科長に素木得一を配置している[53]。東京帝国大学出身の技師も多い中央研究所において、農業部学科長の人事を優位に進めるため、農学博士の学位が必要だった可能性が考えられる。

２－４．博士会推薦による学位取得

農学博士会推薦による農学博士の授与は、1899年６月５日酒勾常明・南鷹次郎２名に授与して以降、学位令改正直前の1919年７月15日までなかった。文部省修文館で開催する博士会は、農学博士が東京以外の地方や外地（台湾、朝鮮）に散在していたため、開会規定人数に達せず、開くことができなかったのが一因であろう。また、1904年以来、博士会の開会にばらつき[54]があり公平さを欠いているとの批判、秘密会議であったために[55]、その推薦の不透明さに批判も多く、官歴のない在野の者は否決されているとの不満など、新聞紙面は博士会廃止論を報じてきた[56]。文部省専門学務局でも、1906年以来、「（一）学問の独立を尊重すること」、「（二）幾度召集するも定規の出席者なく常に流会となるが如き無責任なる博士会を存置する必要なし」として、学位令を改正し、博士会を廃止する計画を打ち出していた[57]。

学位令の改正が迫った1919～1920年、続々と博士会が開催された。1919年４～８月には法学・工学・農学・林学・獣医学博士会の推薦で103名に、1920年４～５月には法学・文学博士会推薦で20名に、学位授与が行われた[58]。1919年６月28日工学博士会推薦による工学博士52名中には、札幌農学校卒業生１名・元外国人教師１名、1919年７月15日農学博士会推薦による農学博士30名中には、札幌農学校卒業生７名・元外国人教師１名がいた。

元外国人教師は、ピーボディとブルックスである。ピーボディは札幌農学校第１～３期生に「Civil Engineering（土木工学）」・「Drawing（製図学）」・「Surveying（測量学）」・「Physics（物理学）」等の土木工学に関する基礎科目を教え、ブルックスは第１～８期生に「Agriculture（農学）」を教えて、長きにわたり農場管理に尽力した。両名は佐藤昌介・南鷹次郎・廣井勇らの恩師である[59]。札幌農学校草創期の外国人教師への学位授与は、「ブルックス先生にも農学博士授与セラレ候[聊]訃カ後進の先生ニ対する敬意ヲ表シ又タ文政当局ハ過去ノ功労ニ報ユル為めと存致候」[60]と佐藤昌介が述べるように、愛弟子たちからの顕彰であった[61]。

一方、札幌農学校卒業生で1919年博士会推薦により農学博士・工学博士となった者は、技師・企業役員・高等農林学校教授などと職種は異なるが、いずれも各学界において多数の専門著書・論文発表のある研究者であった。真島健三郎は建築構造学（RC 構造）、西田藤次は植物病理学（果樹病害）、堀正太郎は植物生理学（農作物病害）、平塚直治は植物病理学（亜麻病害）、山田玄太郎は植物病理学（銹菌全般）、大脇正諄は作物論、東郷実は植民論、西垣恆矩は産業組合論の専門家であった。研究業績に加え、実業界・教育界上での実績・貢献が認められたものと考えられる。

２－５．大学院に入り定規の試験を経た者

1913年、大学院に初の入学者があった。いずれも、1907年東北帝国大学農科大学大学予科に入学、1913年に本科を卒業した市川厚一、逸見文雄、坂村徹、中島廣吉の４名である。翌年、中島が助教授に採用され、1915年には新たに逸見武雄が入学した[62]。1919～1920年、市川厚一、逸見文雄、逸見武雄の３名は農科大学において学位審査を受け、大学院に入り定規の試験を経た者として、獣医学・農学博士の学位を取得した。いわゆる、課程博士の誕生である。農科大学教授会での審議は、学位請求論文の提出者と同様に、論文審査によるものであった[63]。一方、坂村徹は、植物生理学専攻のため、東京帝国大学理科大学に学位請求論文を提出して、理学博士を取得した。

農科大学期には、大学院の学生は各年度１～５名しかおらず、ほとんどが将来の教授候補者であった。大学院在学中に、市川厚一は「病理学一斑　殊ニ腫瘍発生ニ就テ」を東京帝国大学医科大学の実験室で研究し、坂村徹は遺伝に関する細胞学的研究の基礎知識養成のために東京帝国大学理科大学で研究するなど、大学院在学のままでの在外研究を許可された[64]。大学院は、研究者養成コースとして、優秀な学生を囲い込み、博士の学位をすみやかに取得させる機能を果たしていた。

むすび

札幌農学校長佐藤昌介は、1898年12月改正の学位令を、札幌農学校の存在意義にかかわる法令と捉えて、即座に行動に移した。佐藤昌介は、文部大臣・東京帝国大学評議会・文部次官に博士推薦の具申をすることで、札幌農学校が博士の学位を受け得られるべき学力を有する卒業生、博士の資格を充分具備した実績を有する卒業生を輩出していることを示し、駒場農学校・東京農林学校・東京帝国大学農科大学に教育程度・実績は決して劣るものではないことを広くアピールした。そのアピールは功を奏し、1899年３月には、札幌農学校卒業生から、佐藤昌介自身も含め、５名の学位取得者を出した。その後も、1899年４月には、農学博士会での推薦を駆使して、さらに１名（南鷹次郎）への農学博士の学位授与を実現させた。「農黌拡張論ヲ主張シ殊ニ程度ヲ上セ（博士等）学位ヲ授与シ進ンテ北海大学ヲ創起スル」という大目的をもって、佐藤昌介は、1898年12月改正の学位令を最大限に利用し、札幌農学校卒業生に学位を取得させ、札幌農学校の実力を内外に示し、札幌農学校の大学昇格運動を推し進める動力のひとつとすることに成功した。その成果は、1899年７月17日、札幌農学校卒業式に、文部省学務局長となっていた上田萬年が列席し、文部大臣樺山資紀の祝辞を代読した際にもあらわれた。上田萬年は、札幌農学校第17期生に向かって、「須く自ら省み出て、実業に従事すると進て学理の蘊奥を究むるとを問はず皆能く身を修め行を謹み不屈不撓以て学芸の進歩を助け」よと述べた[65]。「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル学術技芸ヲ教授シ及其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トス」（帝国大学令第一条）[66]と規定されたように、「学理の蘊奥を究むる」のは帝国大学を象徴するものであった。

文部大臣の式辞には、札幌農学校の大学昇格への理解がうかがえる。

1907年９月東北帝国大学が設置され、札幌農学校は東北帝国大学農科大学に昇格した。農科大学長に就任した佐藤昌介は、今度は農科大学学長として、札幌農学校・農科大学卒業生の学位取得を奨励し、農科大学教官の陣容を強固にするため、学位取得をさらに推進した。農科大学学長としての権限を生かし、農科大学教授には東北帝国大学総長の推薦をとりつけ、農科大学助教授には学位請求論文を提出させて農科大学教授会で審議を行わせ、学位取得を自身の大学内で円滑に進めた。

1898年学位令下における札幌農学校・東北帝国大学農科大学の卒業生の学位取得者数は49名（その内、３名は２種類の学位を取得）、農学博士のほか、法学・工学・理学・獣医学・文学博士を輩出した。そのうち、東北帝国大学・北海道帝国大学の総長推薦、農科大学・農学部の教授会審議（学位請求論文及び大学院）により、母校において学位を取得したものは29名に達した。学位授与権は文部大臣にあったが、学位授与資格の審査は帝国大学分科大学の教授会が審議する権限であったため、札幌農学校が帝国大学へ昇格したことは、卒業生・教官の学位取得数を増加させることにとつながった。

1918年４月、北海道帝国大学が設置され、東北帝国大学農科大学は北海道帝国大学農科大学となり、佐藤昌介宿願の独立が果たされた。農科大学・農学部教授の構成と学位との変化をみると、1907年10月現在の東北帝国大学農科大学教授は８名、そのうち、博士の学位を有する者は５名（佐藤・宮部・南・松村・大島）と62.5％にとどまっていた。その後、1920年５月現在の北海道帝国大学農学部の教授は24名、博士の学位を有する者も24名（農学科／南鷹次郎・時任一彦・須田金之助・星野勇三・明峰正夫・東海林力蔵、農業経済学科／高岡熊雄・森本厚吉、農業生物学科／宮部金吾・松村松年・八田三郎・伊藤誠哉、農芸化学科／大島金太郎・半澤洵・三宅康次・田所哲太郎、林学科／小出房吉・新島善直・宍戸乙熊・宮井健吉、畜産学科／橋本左五郎・小倉錪太郎・加藤泰治・高松正信）と100％になり、北海道帝国大学農学部教授の学位取得は、北海道帝国大学総長佐藤昌介のもとで完結した[67]。佐藤昌介は、1898年改正の学位令を駆使して、北海道帝国大学農学部の教官陣容を整えることを成し遂げた。

1919年７月30日、佐藤昌介は、渡米中の宮部金吾教授に宛て、「同氏[山田氏]、大脇、平塚、西田、東郷、西垣ノ諸氏博士会の推薦ニテ学位ヲ授与セラレ候同時ニ加藤氏ノ獣医、森本氏の法学も同様他ノ残リノ同僚も林学又ハ農学と相成爰レニテ落着候」[68]と、1920年７月の学位令改正を前にして、1898年学位令下における卒業生・教官の学位取得が完了したことを、感慨深く、伝えた。

［注］

1）　帝国大学発足以前の「学位」は、東京大学・工部大学校・駒場農学校等の卒業試験合格者を対象として授与された「学士」号を指していた。しかし、1886年３月公布の帝国大学令は、分科大学に入り定規の試験を経たる者に「卒業証書」を、大学院に入り定規の試験を経たる者に「学位」を授与する

と定めた。そして、1887年５月公布の学位令は、「学位」に「学士」を規定することはなかった。その後、1887年７月５日、分科大学を卒業した者に、「一種ノ称号」として、「学士」を称することが認められた。このような帝国大学・学位制度の整備の中で、札幌農学校も、従来は本科卒業試験合格者を対象に「学位」として「農学士」・「工学士」を授与していたが、1887年以後は称号として授与することとなった（1887年６月30日付［学士称号ノ件］・「公文類聚　第十一編　明治二十年　第二十七巻　学政門一　学政総　校舎一」国立公文書館蔵、『東京大学百年史』通史一・1984年・964–967頁、前掲『北大百年史』通説55–56・79–80頁を参照）。

2）　前掲『北大百年史』通説、166–169頁を参照。

3）　1898年３月６日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（北海道大学大学文書館蔵。以下、大学文書館と略す）。なお、前掲『北大百年史』通説168頁では、大学昇格運動は1899年春に開始されたと記述されている。しかし、前述の佐藤昌介書簡や松永武雄・渡瀬寅次郎ら同窓生の宮部金吾宛て書簡（大学文書館蔵）からは、1898年３月・４月には大学昇格運動が既に活発に展開されていたことがうかがえる。

4）　1919年２月７日、北海道帝国大学農学部・医学部の設置が公布され、同年５月には翌年４月の医学部開学に向けて、医学部教授の任命があった。しかし、本稿では、札幌農学校における大学昇格運動の一環として1898年公布の学位令を考察するため、札幌農学校本科の系譜にある農学部に焦点をあてて、医学部は対象としないこととする。なお、医学部の教官については、1887年公布の学位令下で医学博士の学位取得者はない。1898年公布の学位令下では、６名（井上善次郎（1899年）、今裕（1909年）、秦勉造（1916年）、越智貞見・有馬英二（1920年）、三輪誠（1921年））が医学博士の学位を取得したが、教官の大部分は1920年公布の学位令下での学位取得者であった（文部省専門学務局『学位録　自明治二十一年五月至昭和二十九年三月』1934年、『北海道帝国大学一覧　自大正十三年至大正十三年』1924年・94–101頁の職員名簿を参照）。

5）　学位令（1920年７月５日公布、勅令第二百号）は、前掲『北海道帝国大学一覧　自大正十三年至大正十三年』69–71頁を参照。

6）　学位令（1887年５月20日公布、勅令第十三号）は、『帝国大学一覧　従明治三十五年至明治三十六年』1892年・15頁を参照。

7）　学位令（1898年12月９日公布、勅令第三百四十四号）、学位令細則（1899年１月７日公布、文部省令第一号）、博士会規則（1898年12月９日公布、勅令第三百四十五号）は、『東京帝国大学一覧　従明治三十二年至明治三十三年』1899年・33–41頁を参照。

8）　新規の４種類は、1890年６月設置となった東京帝国大学農科大学の学科に準じた３種類（農学・林学・獣医学）と、東京帝国大学医科大学薬学科の学科に準じた１種類（薬学）である。

9）　前掲『東京大学百年史』通史一、972–973頁。

10）　件名「十二　本校出身者学位授与ノ件」（起明治三十一年十二月廿二日結同三十二年三月二十日）、札幌農学校簿書№631「明治三十二年　札幌農学校公文録　第一冊　秘密文書　職員異動」、大学文書館蔵。

11）「南」は南鷹次郎（札幌農学校第２期生、教授）を指す。

12）　前掲「明治三十二年　札幌農学校公文録　第一冊　秘密文書　職員異動」。

13）　新渡戸は療養のため渡米しており非職であったが、いずれ帰任する予定であった。

14）　札幌農学校の動物学専門の歴代教授は、駒場農学校卒業生の須藤義衛門、東京帝国大学理科大学卒業生の原十太・同大学撰科修了の八田三郎であった（付表「札幌農学校の教官」、前掲『北大百年史』通説156–161頁を参照）。佐藤昌介は、他校卒業生ではなく、札幌農学校卒業生に切り替えたかったものと考えられる。

15）　佐藤昌介が、渡瀬寅次郎を農学博士に推薦した理由は不明である。しかし、渡瀬は大学昇格運動における在京同窓生の中心人物であり、佐藤昌介が校務運営を諮詢するにあたり、同期生としても気兼ねなく頼りにできた人物であった。その後、渡瀬は1899年２月10日に札幌同窓会東京支会の初代会長に就き、1900年５月17日には佐藤が文部大臣に渡瀬を札幌農学校商議委員に推薦した（『札幌同窓会第

七回報告　明治三十二年二月』1899年・８頁、1900年５月17日付「商議委員ノ義ニ付内申」・札幌農学校簿書№681「明治三十三年　札幌農学校公文録　第一冊　秘密文書　職員異動」大学文書館蔵）。

16）前掲「明治三十二年　札幌農学校公文録　第一冊　秘密文書　職員異動」。

17）博士会規則の第十条は、「同種ノ博士七名ニ充タサル間当該博士会ノ職務ハ東京帝国大学評議会ニ於テ之ヲ行フ」（前掲『東京帝国大学一覧　従明治三十二年至明治三十三年』36頁を参照）。

18）前掲「明治三十二年　札幌農学校公文録　第一冊　秘密文書　職員異動」。

19）同上。

20）東京大学総合企画部保有文書「明治三十二年二月七日評議会記事」、「明治三十二年二月十四日評議会記事」。同文書は、2015年1月21日付で東京大学に情報開示請求を行った結果、2月19日付で開示決定通知書が発行され、3月3日付で開示の実施があったものである。同文書には「博士会規則第十条ニヨリ本会ニ於テ農学、林学、獣医学及薬学博士ノ学位ヲ授クヘキ学力アリト認ムルモノニ付協議アリタルニ結局投票ヲ行フ〻トシ其当選シタルモノ左ノ如シ」（2月7日評議会記事／総長欠席・評議員12名出席）、「博士会規則第十条ニヨリ［redacted］ニ農学博士ノ学位ヲ与フヘキ学力アリト認ムヘキ否ヤニ付投票ヲ行ヒタルニ八票ヲ以テ可決セリ」（2月17日評議会記事／総長・評議員9名出席）と記載がある。しかし、2月7日記事は次頁全文・その次の頁の半分が不開示、2月14日記事は4文字程度が不開示とされたため、各日で農学博士に選考された者は特定できなかった。

21）1899年３月24日付『読売新聞』１面は、「博士号授与式」と題し、「五十余名の新博士候補者ハ既に其選挙を終り目下文部大臣の手に於て決判若くハ審査中なるが愈々来る廿七日文部省に於て其授与式を挙行する由」と、学位授与の動向を報じた。

22）1899年３月28日付『官報』502-504頁。

23）理学博士会は1899年２月８～９日に開会した（「学界彙聞　博士会」、1899年２月３日付『読売新聞』１面）。その博士会で宮部金吾を推薦したのは、旧知の松村任三（東京帝国大学理科大学教授、植物分類学専門）だったという（1899年４月14日付宮部金吾宛て松村任三書簡、大学文書館蔵）。

24）「学士及卒業生姓名」、『東京帝国大学一覧　従明治三十二年至明治三十二年』1898年、537-542頁。

25）1903年７月25日付「農事試験場技師兼農商務技師農学博士沢野淳叙勲ノ件」、「叙勲裁可書　明治三十六年　叙勲巻三　内国人三」国立公文書館蔵。

26）1929年７月12日付「元東京帝国大学総長古在由直叙勲ノ件」、「叙勲裁可書　昭和四年　叙勲巻三　内国人三」国立公文書館蔵。

27）1938年12月６日付「故恒藤規隆叙勲ノ件」、「叙勲裁可書　昭和十三年　叙勲巻八　内国人八止」国立公文書館蔵。

28）玉利はミシガン大学で修士号（M.S.）を取得している（前掲『東京帝国大学一覧　従明治三十二年至明治三十二年』267頁）。

29）「学界彙聞　博士会」、1899年５月３日付『読売新聞』１面。農学博士会会長には玉利喜造が互選された。

30）1899年４月23日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（大学文書館蔵）。

31）酒勾常明。酒勾は、駒場農学校農学科1880年卒業・農芸化学科1883年卒業の農学士・農芸化学士で、東京農林学校教授・幹事、帝国大学農科大学教授を歴任した後、1892～96年には北海道庁財務長も務めた農商務省技師。駒場農学校では、沢野とは農芸化学科で、恒藤・横井・酒勾・玉利とは農学科で同期。農学博士会出席の６名全員とゆかりの深い人物で、『改良日本米作法』（有隣堂、1888年）を著し、北海道における稲作推進の功績を有していた（「官吏進退　明治二十二年官吏進退十二　農商務省」、「官吏進退　明治二十五年官吏進退三　内務省二」、「任免裁可書　明治三十一年　任免巻八」国立公文書館蔵）。

32）1899年５月１日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（大学文書館蔵）。

33）1899年５月11日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（大学文書館蔵）。

34） 松村松年は、文部省外国留学生として、ブダペストの国立博物館で研究中の1902～03年に、独文論文「日本産浮塵子科の研究」に「これによりて理学博士の学位を請求致し候」と手紙を添えて文部省宛に送っていた。学位請求をしたのは、助教授の頃である。しかし、申請手続の誤りにより、1903年10月帰国後に改めて申請した。12月１日には教授に昇任したため、学位が授与された12月26日には教授となっていた（『松村松年自伝』造形美術協会、1960年、185頁）。

35） 本稿では、北大の卒業生・教官の学位取得状況は、文部省専門学務局『学位録　自明治二十一年五月 至昭和九年三月』（1934年）掲載の氏名・授与年月日をもとに、『官報』彙報欄の学事記事「学位授与」を、『札幌農学校一覧』・『東北帝国大学農科大学一覧』・『北海道帝国大学農科大学一覧』・『北海道帝国大学一覧』掲載の卒業生・職員名簿にて照合した。なお、『帝国大学大観』（帝国大学学友会、1939年）、『日本博士録』（教育行政研究所）、『大日本博士録』（発展社出版部）、『博士名鑑』（フーズ・フー・イン・ジャパン社）などの市販の博士名簿は、学歴・学位取得の種別など記載情報に誤記が多く、正確さに欠けるため、参考する程度にとどめた。

36） 1908年10月16日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（大学文書館蔵）。佐藤昌介は、渡台のため神戸港へ向かう途中の10月14～15日に文部省へ登省し、大学人事・留学・予算等の懸案事項を協議した。

37） 1911年５月29日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（大学文書館蔵）。

38） 法学博士会には、高岡の恩師である新渡戸稲造（当時は東京帝国大学法科大学教授）が会員であったことから、新渡戸が高岡を推薦した可能性が高い。

39）「教授会議事録　大正三年一月ヨリ」、「農学部教授会議事録　大正八年四月以降」（大学文書館蔵）。

40） 高岡熊雄、松村松年への農学博士の学位授与については、1919年10月３日付『官報』69–71頁に、著書・論文の要旨と学術的評価が詳細に掲載されている。

41） 農業経済学科教授の森本厚吉（経済原論財政学講座担任）に法学博士が授与されたのは、森本の専門の研究が経済学・財政学であったため、先例同様に、法学に属するものと判断されたからである。「審査委員ニ於テハ法学博士ニ対シ審議スルノ権能及脳[能]力ナキヲ以テ総長ヘ一任スヘキ」と、森本への法学博士の授与審議は、総長佐藤昌介に一任された（1919年６月26日会議、総長諮詢事項「博士推薦ニ関スル件」、前掲「農学部教授会議事録　大正八年四月以降」）。

42）「教授会議事録　明治四十年九月ヨリ大正二年十二月ニ至ル」（大学文書館蔵）。

43） 1908年10月16日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（大学文書館蔵）。

44） 1908年10月29日付『官報』705–706頁。

45） 前掲「退職者履歴資料」を参照。

46） 同上。

47） 前掲『北大百年史』通説、160–161頁。

48） 岡村金太郎（東京帝国大学理科大学1889年卒業、理学博士、水産講習所教授）。海藻学研究の先駆者。

49） 1907年２月17日付宮部金吾宛て遠藤吉三郎書簡（大学文書館蔵）。

50） 前掲「退職者履歴資料」を参照。

51） 岡本半次郎は、学位を取得した翌年の1920年に北海道庁より朝鮮総督府勧業模範場技師に転出した（『札幌同窓会第四十二回報告　大正九年十二月』38頁）。朝鮮に赴く前に、研究成果をまとめて学位を取得しようとしたのかもしれない。

52） ４月14日付宮部金吾宛て三宅勉書簡（大学文書館蔵）。内容より、1916年頃と推定。

53） 拙稿「台湾に渡った北大農学部卒業生たち」、『北海道大学大学文書館年報』第６号、2011年３月、21–22頁。

54） 1899～1920年の約20年間に博士会の推薦により学位を授与したのは、法学博士会によるものが12回で最多を占め、次いで文学博士会が８回と多かった。

55） 各博士会は、博士会規則のもと、文部省高等官を幹事に、文部属を書記にあて、文部省修文館で

開会した。各博士から提出した新博士候補者については、無記名投票により多数決で議決した。議決した推薦者について文部大臣への上申手続を済ませた後は、諸般の秘密書類を焼却して散会したという（「教育学術界　法学博士会」、1905年４月26日付『読売新聞』２面）。前掲の1899年５月１日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡でも、第一回農学博士会の模様について「博士会ハ秘密会故 detail ハ不申之」とある。

56）「文学博士仲間の頑迷」（1904年６月７日付『読売新聞』２面）、「博士推薦の是非（博士会の推薦問題）」（1910年10月31日付『読売新聞』２面）などを参照。

57）「学位令改正の成行」、1906年12月14日付『読売新聞』２面。他に、「学位令改正の議」（1906年８月29日付『読売新聞』２面）、「学位令改正の内容」（1907年９月23日付『読売新聞』２面）、「学位令の改正　（博士会全廃論）」（1911年９月22日付『読売新聞』２面）などを参照。

58）『官報』の学事彙報欄「学位授与」を参照。

59）「受講ノート――札幌農学校生の学業記録」、『北海道大学大学文書館年報』第４号、2009年３月、100–169頁。

60）1919年７月30日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（大学文書館蔵）。

61）ブルックスと同時に、駒場農学校の元化学教師エドワード・キンチ（Edward Kinch）にも、博士会推薦により農学博士が授与されている。

62）『東北帝国大学農科大学一覧　自大正二年至大正三年』（1913年）～『東北帝国大学農科大学一覧　自大正四年至大正五年』（1916年）掲載の学生生徒名簿・職員名簿を参照。

63）前掲「教授会議事録　大正三年一月ヨリ」、「農学部教授会議事録　大正八年四月以降」（大学文書館蔵）。

64）同上。

65）「第十七回卒業式」、『学芸会雑誌』第30号、1899年８月、30頁。

66）前掲『東京帝国大学一覧　従明治三十二年至明治三十二年』15頁を参照。

67）『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十年至明治四十一年』1908年・92–93頁、『東北帝国大学農科大学一覧　自大正八年至大正九年』1920年・59–65頁。

68）前掲1919年７月30日付宮部金吾宛て佐藤昌介書簡。

（やまもと　みほこ／北海道大学大学文書館員）